

1 梅雨入りについて

平年通りであるならば、6月11日頃に梅雨入りとなりますが、今年は23日と遅い梅雨入りとなりました。一方、梅雨明けの平均日は7月24日ですが、本年はどうでしょうか。長い梅雨になるのか、短い梅雨になるのか気になるところです。

さて、天気の基本は極地方でできる冷たい空気(寒気)と赤道付近でできる暖かい空気(暖気)のぶつかり合いです。(北に寒気、南に暖気ができるということ。北に行けば寒い。南は暖かい。)

特に、その境目となる北緯30~40°付近に日本列島が横たわります。よって、日本は寒気と暖気の戦いの場「前線」ができやすいところと言えます。しかも、日本列島は四方を海に囲まれているので、水蒸気を多く含む空気のせめぎ合いの場となります。その中でも梅雨前線は主として太平洋高気圧(南・海上)にできるので高温・多湿)とオホーツク海高気圧(北・海上)にできるので低温・多湿)のせめぎ合いです。それぞれが多湿ですから、雨量も多くなるわけです。

また、梅雨入りが早ければ梅雨明けも早くなるのかについては、ニュースでも取り上げられておりますが、これまでの経験値から伺えることは、梅雨入りが早いからといって梅雨明けも早くなるわけではないようです。

なお、気象庁の3ヶ月予報によれば、東日本太平洋側では、7月前半は平年に比べ曇りや雨の日が多いが、後半は、平年と同様に晴れの日が多い見込みとのこと。

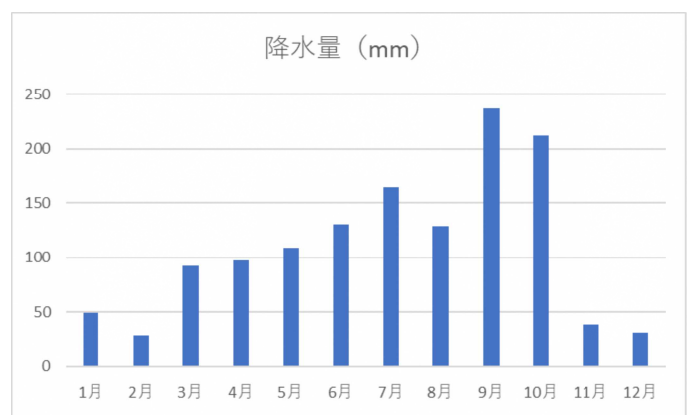
さて、新地町は梅雨にどれくらいの雨が降るのでしょうか。2011年~2020年

までの月ごとの平均値をグラフにしてみました。【新地町の年間降水量は平均1333mm】

グラフから、梅雨時の6月(130mm)、7月(164mm)よりも9月(236mm)の方が雨量が多い傾向にあることがわかります。東北太平洋岸で、この傾向が顕著になりますが、秋雨前線や台風の影響によるものです。ここ10年の新地町における一日あたりの最大降水量は令和元年(2019年)10月12日の234mm(台風19号による豪雨)、一ヶ月あたりについても、令和元年10月(2019年)の628mm(台風19号と10月25日の大雨)です。

最近の地震により地盤が脆弱になっている可能性が高いため、雨による土砂災害の危険性が通常より高まっていると考えられます。本日6月12日は、奇しくも宮城県沖地震の発生した日でもあります。(1978年)

私事になりますが、その一ヶ月後に裏山が崩れ、自宅の一部が損壊したことがありました。保護者の皆様におかれましても、梅雨が本格的になる前に、お住まいの周囲の状況について確認しておくことが大切と考えます。



(※上図:政府広報より引用)

2 梅雨の753の法則

梅雨前線は南北にゆれながら停滞するので先の天気が予測しにくいことから、梅雨の時期は予報官泣かせとも言われています。前線がちょっと北に上がれば「雨」、南に下がれば「晴れ」という感じで、微妙な違いでその地点の天気が大きく変わってしまいます。ですから、この時期の天気予報については、最新の情報入手が必要です。ここで、雨が降る・くもり・晴れの目安として「753の法則」を紹介します。自分の居るところが梅雨前線から、どれくらいの距離にあるかによって、次のような目安があるとされています。

<梅雨前線との距離>

300km以内:雨降り (およそ東京~仙台間)

500km以内:くもり (およそ東京~盛岡間)

700km以内:薄ぐもり(およそ東京~青森間)

700km以上:晴れ

梅雨入りすると「早く梅雨が明けないかな。」
と思いますが、梅雨明けがなかった年は、
私たちの住む東北地方ではいくつかあり、
一昨年2022年もそうした年となりました。
史上最速の6月29日に梅雨明けとしたものの、
7月中旬から上空の寒気の影響で大気の状態が
不安定となり、雷や雹被害に見舞われました。

記録的に速い梅雨明けと思いきや、気温こそ高めに推移するものの7・8月の半分は雨降りとなり、一日も太陽が姿を見せない日は15日を数えました。(相馬市のアメダスデータ)

こうして、気象庁は、9月1日に梅雨明け宣言を撤回し、「特定できない」とする事態となりました。ちなみに、東北南部で梅雨明けがなかった年は、ここ50年に5回あり、とりわけ平成5年(1993年)は、記録的な冷夏も重なり、「平成の米騒動」が起きました。

今年の夏休みは、「夏空を満喫できる」を期待しておりますが、東北地方の太平洋岸には冷たく湿った東よりの風「やませ」が吹きつけることがあります。

岩手県出身の詩人・宮沢賢治は、その詩「雨ニモマケズ」の中で“サムサノナツハオロオロアルキ(寒さの夏はおろおろ歩き)”と「やませ」による冷夏を表現しています。「夏の寒さは稲作に冷害をもたらす。凶作になってしまうと分かっている、自然を相手になす術[すべ]もない。宮沢賢治が農家のやり場のない気持ちを表現したのだろう」と解釈されています。

また、「やませ」は長期間にわたって吹くと冷害をもたらすことから、餓死風や凶作風などと言われ恐れられてきました。

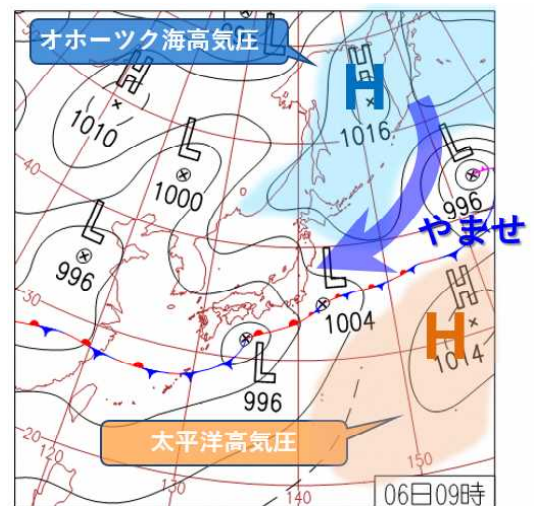
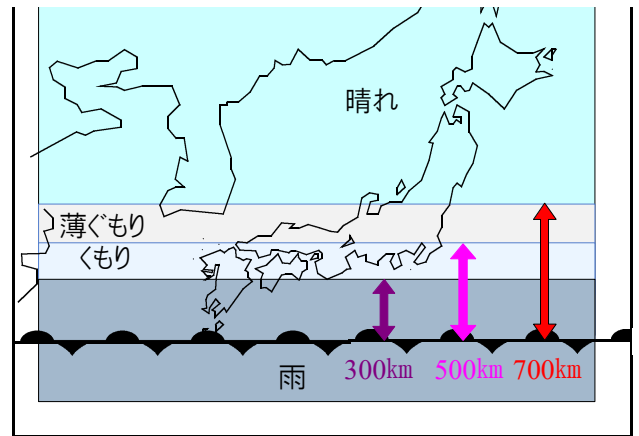
江戸時代後期にあった天明・天保の飢饉では、日本全国でたくさんの犠牲者を出し諸藩の財政が窮乏しました。相馬中村藩も同様で、特に天明の飢饉では、当時の人口の3分の2が亡くなるなど大きな被害を受けました。

これらの飢饉を引き起こしたのが、火山の噴火(*)による寒冷化と「やませ」と言われています。

特に「やませ」の長期化は、東北地方の太平洋側に凶作を引き起こしました。凶作は東北地方での飢饉を発生させただけでなく、江戸や大坂では米の価格が上がり、打ちこわしが発生するなど、幕府体制を揺るがし、社会や経済を大混乱に陥れました。

戦後、冷害に強い品種がつけられ、さらには小麦の大量輸入によるパン食の普及もあって、飢饉に至ることはなくなりました。

しかし、消費者が食味・品質を追求する傾向が強まったため、東北地方の太平洋岸でも、ブランド米志向が進み、冷害時に頻発するいもち病に弱いが味の良い品種(コシヒカリやササニシキなど)が集中栽培されるようになりました。そうした中、1993年(平成5年)の記録的な冷夏により“平成の米騒動”と呼ばれるほどのコメ不足に陥ります。米の全国の作況指数(平年値100)は



2019年7月6日の地上天気図》典型的なやませ時の天気図

(気象庁ホームページより)



冷害のため、実らないまま秋を迎えたササニシキ

平成5年(1993年)10月宮城県内

(気象庁ホームページより)

74、福島：61、宮城：37となり、タイなどから米を緊急輸入する事態となりました。9月になって新地町の田んぼには、青立ち状態のイネが広がっていました。その反省からササニシキやコシヒカリの栽培はすたれ、いもち病耐性を持つひとめぼれ等の栽培が広まりました。

* 当時の火山噴火と飢饉

天明の飢饉(1782~1788年):「やませ」に加え、国内では浅間山、桜島等の火山噴出物による日傘効果、これにアイスランドのラキ火山の巨大噴火が加わる。これはフランス革命の遠因になったとも。

天保の飢饉(1833~1837年):「やませ」に加え、日本から見てほぼ地球の反対側にある中米ニカラグアにあるコシグイナ火山で同年1月に起きた大噴火による日傘効果

3 梅雨について(予報は難しい)

さて、「梅雨」は、初夏から真夏にかけて季節の移ろう際に、曇りや雨の日が多くなる季節現象です。暦上は「今日から夏」となる「立夏(5月5日頃)」等がありますが、実際の季節感を伴う季節現象である「春」や「夏」等については、はっきり線引きをすることはできません。

季節の移り変わりにはいわゆる「グラデーション」があります。「今日から春」「今日から夏」などと、ある日を境に季節が次に移ったと言い切ることはできないのです。

でも「梅雨明け」と報道されれば、心はどこかスッキリしますし、国民的な関心もあります。ですから、気象庁が「真夏がやって来た」と根拠を持った判断により「梅雨明け」の発表となります。ただし、具体的な数値等の基準はなく、様々な資料を分析して、総合的な判断がなされるようです。

ここで、先に記した「梅雨明け宣言の撤回」を振り返ります。

理科の授業では、梅雨前線が離れ、あるいは消滅し、太平洋高気圧に広く覆われるようになる状態を「夏」としてしています。実際、私こと1人の理科教員が昨年の6月26日の天気図を観ると、既に「真夏の天気図」になっています。【右図】

気象庁としては、国民的な関心事である「梅雨明け」ですから、その気象状況は一時的ではなく、継続されなくてはなりません。

また、「予報が外れる」ことは避けなければなりません。

その気象庁でさえ、9月1日に梅雨明け宣言を撤回し、

「特定できない」とする程、異常な梅雨・夏だった訳です。

現在は、インターネットを通じて、スーパーコンピュータがはじき出した最新のデータを目にすることができます。

おおよそ2週間先の予測も示されていますが、2週間先だとヨーロッパ、アメリカ、日本等の予測シミュレーションに違い

が見受けられます。昨年も7月になって梅雨前線が戻ってくる可能性を示しているデータもありました。

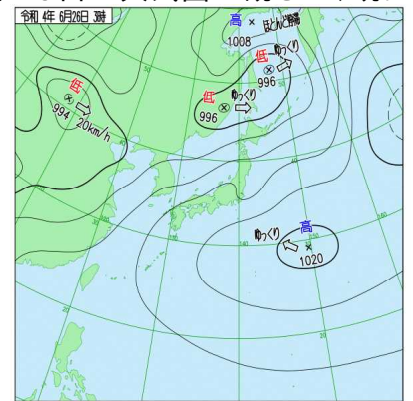
各国が誇るスーパーコンピュータをして、違いがある訳ですから、「梅雨明け」の発表を任せられる気象庁職員の皆さまの重圧はいかばかりかと存じます。

仮に「梅雨明け」の発表が早めに出たら、「雨の季節が終わった」と受け取られ、大雨災害に対する備えに緩みが生じることもあるでしょう。気象庁が「梅雨入り」を発表し、大雨や長雨に注意喚起するのは防災上の役割も大きくあるはずで、ですから、簡単に「梅雨明け」と発表するのは、防災上、宜しくないという判断もあるのだと思います。【右図 2022年 6月29日の天気図 *】

一方で、「梅雨明け」=「真夏がやって来た」と受け取れることから、熱中症予防などの暑さ対策については「梅雨明け」の発表 が対策意識を高めるとも言われています。

最近の熱中症の発生状況は、2010年以降大きく増加し、特に暑い夏となった2018年は9万2710人、次いで2019年が6万6869人、2020年が6万4869人と近年多くなっています。「梅雨明け」と早く伝えることは、健康安全面で大きなメリットがあるようです。

※ 梅雨入り、梅雨明けの期日は、後日、春から夏にかけての実際の天候経過を考慮した検討を行った結果、変更となる場合があります。* いずれも気象庁ホームページより引用



【↑2022年 6月26日の天気図 *】

